

タルトたんどん

「はい、チョコとイチゴのドーナツですね。ちょっと待っててくださいね」

白い車の中で、わたしは走りまわりました。窓で注文きたら、近くのスイッチ押しして。ころん、と出来上がったドーナツに、手前にあるチューブにぎゅっ、と抱きついてしぼって。ふう、これでふたつ、と。

「フェレットちゃん、こっちもおねがい」

「はいはい」

ああ、またお客さま。あとなん往復しなくちゃいけないのかしら？

「ねえ、いつものフェレットちゃんとは違うの？」

「はいー、ちょっと違うんですよー」

いつものタルトさまね。それで、わたしがつくっても皆さん驚かないんですか。それにしても、あーん、もつ。わたしにドーナツ屋さんまかせて、

どうするつもりですか〜っ!!」

「どうしたの、タルト じゃなくて、アズキーナさんだっけ？」

「え？」

顔をあげたら、明るい髪の女の子がこっちをのぞきこんでました。

「えと、ピーちゃん？」

「またかおるちゃんね？ しよーがない。ミキたん、ブツキー、手伝おつか？」

後ろにいた、あのおふたりにそう言ったら、みんなでパラソルよいしょって運びはじめました。ああ、たすかりましたあ。それじゃ、ドーナツづくりもおまかせして

「ちよ、ちよっとアズキーナさん。もどつてもどつて」

え？

「わたしじゃ小さくて、おジャマに」

「でも、かおるちゃんにお願いされたんでしょ？ そのドーナツマシンはね、かおるちゃんか、かおるちゃん

3 タルトたんどん

んがお願ひした人しか動かせないんだよ」

え〜っ!?

「お客さんの案内はするから。じゃ、お願ひね」

そんなあ　　ああ、タルトさま、はやく帰ってき
てください〜いつっ!

—— たんとん・たんとん

ふしぎな音が聞こえてくるなか、くるくる回る椅子に乗って、わいは虹色の景色をながめとつた。

かおるはんが一緒やから、ヘンでも危なくはないんやろうけど

「大丈夫やるか?」

わいの口からボツンと言葉がこぼれたんを、

「アズキーナさんかい? あー　うん。だいじょぶよ。あの街の人たちはノリがいいからねえ。なんだっ
たら手伝って作っちゃうかもしれないね。ぐはっ」

かおるはんが拾うてくれたわ。お気楽やなあ。

「それ、ええんかいな?」

わいらは当たり前でも、人間が見ればフェレットやからな。食べもん運んだりして、つまみ出されるんやないか、思うたけど。

「いーのいーの。もともと、そんな感じの店だからね。みんなで作って、オレにばいっ、って渡してくれたのさ」

渡した? なんやろ、いつたい。

「お、ついたみたいだね」

—— たんとん・たんとん

ふしぎな音がちよい大きくなった思つたらすぐ小さなつて、周りの景色が元に戻つてつた。

ふう。ちよい安心したわ。ドーナツ屋台でいきなり「ちよつと付き合つてんかー」言われてイスに座つたら、いきなりあの「たんとん」ちゆう音やつたもんなあ。まあ、かおるはんのことやから、いちい

ち突っ込んでっいたら身体からだもたんけどな。

さて、まるつきりもと通り　て、ほんまにもと通りやな。

「そんで、どこ連れてきたんや」

「ん？　移動はしてないよ。クローバータウンさ」
移動してへん？

わいはぐるーつとそこから見渡したった。ほんまに公園も商店街もあんま変わらんなあ。けど、

「そやけど、ドーナツ屋台あらへんやんか？」

「ん、ちよつと行き過ぎたかなあ」

ぼそぼそ言ってるけど、なんのことやろ？　て、あれ？　なんや、森のところに誰か横になつとんな。

「　んんつ？　ちよ、あそこで倒れとんの、あんさんやないか!?　いままでここにおつたんに、なんやこら??」

「あ、気にしない気にしない。オレ、そこには声だけしか行けないから。ほら、同じ時間にふたりいる

とややこしいからさ。オレは見えないの」

同じ時間にふたり　　っちゅうことは！

「むかしに来たんかい！」

「ああ、そう　　だいたい7年前かな」

7年？

「でもほら、違つ世界は、よく行ってるじゃない、タルやんはさ。げは」

相変わらずやなあ。そやけど、まずは助けんとな。

わいは森の方に走つて　　ん？　なんや、走ってるはずなのに、椅子から降りられへん？

「装置の外には出られないからさ。タルやんが思つた方に装置ごと動くようにしてあるよ」

はあ。複雑なんか単純なんかわからん機械やなあ

さすががおるはん、ちゅう感じや。つと、ついたついた。

「　苦しんでる感じやないなあ。食うてへん、とかやるか？」

「そ。このときはオレが仕事で失敗してね。飲まず

5 タルトたんどん

食わずでここまで逃げてきたんだけど、倒れちゃってさあ」

「逃げて、て。なにやらかしたんや?」

声だけするとこに振り返ったけど、なーんも返ってきいへん。これも相変わらずや。ふう。

『あそこ、だれかたおれてる!』

ドーナツも持ってへんし、どないして助けよか、思てたら、高い声が聞こえてきたわ。声といっしょに、まるっこいのがみっつ、ころころ走ってきとん。

「子供やなあ」

ちっちゃい女の子が3人。走ってきてんけど、こっちは見とらん。わいも見えへんのかいな?」

「ああ。3人とも知ってるでしょ?」

知ってる?言われてみると、なんや覚えが あーっ!

「び、ピーチはんや。ちっこいピーチはんたちやないか!!」

「正解。あの嬢ちゃんたちに、水とお手製のドーナ

ツもらってね。なんとか生きかえったんだよねえ。

ま、付き合って欲しかったのはこじやないし、退散しようか」

—— たんどん・たんどん

またふしぎな音が聞こえて、目の前が虹色になつてくんを、わいはぼーっと見とつたんやけど、

『——オジサンなら、もっとうまいドーナツ、作れるぞお』

『じゃ、作って!』

『ああ。作ってあげるよ。かあるちゃん特製のドーナツをね。ぐはっ——』

全部虹色になる前に、声がちっちゃく漏れてきたんや。

「それで、ドーナツ屋はじめたんか」

わいが顔をあげたら、かおるはんが笑った。

うなずきませえへんけどな。

「はい、オレンジクリーム。どうぞ」

一番遠くのパラルルの下に、クリーム入りのチューブをおいたら、お客さんが目を白黒させちゃった。ふふ。

「ブッキー、それ終わったら、いちごねー！」

屋台に返事して、わたしはまた、お客さんに向き直ったの。説明しないと、わけわかないものね。

「すみません。今日はフェレット店長だから、細かいことできないんです。クリームはセルフサービスで、終わったら車にかえてくださいね。そのかわり、組み合わせ自由でお値段そのまま、ですから」

できるだけ、にっこり笑ってわたしは屋台に向かったわ。ラブちゃんが『たぶん大丈夫』で決めたことだけど、いい人ぞろいのこの町じゃなかったら、大変だよな。

「これなら、いつもの店長さんいなくても大丈夫じゃ

ないの？」

途中のパラルルから聞こえてきた声に、わたしは思わず首を振って。

「いいえ。クローバータウンには店長——かおるちゃんが必要なんですよ。ドーナツつくってなくても。くはっ」

ちよつとかおるちゃんを真似て言ってみたら、パラルルの下のお姉さんたちが目を丸くして見てた。

うん、なんかいい気分。かおるちゃん気分

—— たんとん・たんとん

「よおし、こんどは時間も合ったかな？」

かおるはんの声の後ろで、ふしぎな音がまた小さくなって、目の前の虹色が薄くなって

「うおあっ！」

7 タルトたんどん

わいは思わず飛び退いてもうた。椅子から降りられへんから、気分だけやけど。

『んー、フェレット？』

なにせ虹色なくなったら、目の前がドーナツ屋台の窓。かおるはんの顔がドーンとあるやから。あー、びっくりしたわあ。そやけど、

『この町で飼ってる子、いたっけなあ？』

「フェレットやないわ、かおるはん！ かわいいかわい妖精さんの、タルトやつ!!」

思わず叫んだわいの顔、かおるはんがじーっと見つめて、

『オレのこと、知ってるの？ 有名になったもんだねえ〜。ぐはっ』

「ここのかおるはんには、声が伝わるんやな。つて、そや。もうひとりのかおるはんや。時間も合ってた言うてたし、

「おーい、かおるはん。わいはなにすればええんやーっ!」

空に向かって言うたっただけど、なーんも返ってきへんな。ほんま、どないすればええ、ちゅうねん。

『なあ、タルトくん』

「なんや、かしこまって。いつもみたいに『タルヤん』でええわ。て、わいのこと知らんのやっただけ。えるうすんまへん。で、なんや?」

『ここには、パラソルがあるのかねえ?』

ん?

「パラソルで あるに決まっとるやないか。ピーチはん——とつと。プリキュアのことはまだ知らんのやっただ——ラブはんたちが、よあつまり場にしたらんやから。」

ちゅうか、なんでここには置いてへんのや?」

『ん〜、ある? そっか』

屋台の窓から外眺めてるかおるはんが、ゆっくりぼやけてきよった。また移動するんかいなあ。

それにしても、

「どないしたんやろ、ここのかおるはんは?」

「なーに、簡単なこつだよ」

わいが言った声に、いままで黙だまつとつた方のかおるはんが返してきたわ。簡単、やて？

「ここにはパラソルなんてなかつたんだ。この時まではね。なのに、オレを知ってるタルやんは、ここにパラソルがある、って言うてる。ってことは、タルやんは未来から来た、ってことになるのさ」

はあ。んな面倒なことせんと、はつきり訊きいたらええやんか。

「時間は結構面倒でね。仕方ないから、言葉の端はつこで見つけるしかないんだなあ、これが。げはっ」

目の前がうすく虹色に変わって、こつちのかおるはんが、いつもどおり腰に手をあてて笑てる姿も見えてきて。

あー、はいはい。自称天才やもんな。わいの知らんこといっぱい知つとるんやろうけど、

「んで？ わいが未来から来た、ちゆうんがわかっただけで移動で、なにがしたいんや？」

わいがちらつ、とかおるはんの顔を見上げたら、くいつ、と手えが動いて、車の方さした気がした。ななやいつたい

『あ、中佐かい？ 久しぶり、かおるちゃんだよ。

発信場所はわかるよね？ この街、オレの管轄かんかつかうにするから。なんかあつても、いきなりすごい警察とか出さないでよ——』

な、なんや。えらい物騒ぶつそうな言葉が聞こえてきたで

？

「お願いする前に、やっちゃうんだもんなあ。さすがだよ、タルやん」

虹色が濃くなってくる中、わいの背中がとんとん、てたたかれた。

「嬢ちゃんたちのこと言ったろ？ 妖精さんと自分と嬢ちゃんたちが未来じゃ知り合いになつてる

それできつと、なにかに巻き込まれるな、って確信したのさ。このときね」

9 タルトたんとなん

にやにや笑てる顔みてるよ、疲れてくるわ。あれ、
ちよい待ちや？・ちゅつことは あーっ！

「最初から知つとつたんか、ピーチはんたちがプリ
キユアやつちゅつこと!!」

わいがびよん、と飛びつこう としたけど椅子
から動けへん。あー、もう面倒やなあ！

「タルヤンのおかげで、名前だけはね。ちよつと聞き
覚えのある名前だったんで、派手に暴れても、だ
れもケガしないようにしといたの。一応オトナだし、
オレ。ぐはっ」

—— たんとん・たんとん

またふしぎな音が大きくなつてきて、まわりはま
るつきり虹色になつてもうた。

そんなかで、なんもない空みあげてるかおるはん
は、なんや満足そくな顔しとつたんや。わいが思わ
ずためいきついてまうくらい、な。

—— たんとん・たんとん

音が小さなつて、またまわりが公園になつた。3
回めやとさすがに慣れたなあ。

「チョコチューブ、だれ持つてますかー？」

「ドリンク注文した方、どなたー？」

遠くでドーナツ屋台の音がしとる。ピーチはんた
ちが手伝つてくれるんやな。

それにしても、いままでと違つて、屋台の前やな
いんか うわっ!?

「悪いね、タルヤン。ちよつとどいてくれる？」

「い、言つまえに追い払うんやないわ!て、ちよい
待ちや。その椅子持ち上げて、どないするつもり
うわわっ!?!」

ガチャン!!

でっかい音たてて、椅子がバラバラになつてもうた。な、なんや??

「できる、つてわかりや、悪いこと考えるひとは多いからねえ。だから、ナイシヨ。」

「ちやーんと完成したら、使わせてあげるから。そう
だ、タルヤンから名前もらおう。『タルトたん』
とかね。げはっ」

笑いながら屋台に向かつて歩いてく影を、わいは
何度かこわれた椅子振り向きながらついつつた。

「たったこんだけのために、こんなどえらい機械作
たんか て思いながら。」

「あーっ！ かおるちゃんみーっけ!!」

屋台にもどつたわいらを最初に見つけたんは、やっ
ぱピーチはんやっただけど、

「おかえりなさい、タルトさま」

わいはその脇すりぬけて、疲れきつたアズキーナ
はんのところで背中貸したつた。かおるはんは、ピーチ
はんたちから叩かれながらこつち来とるし、はあ。と
りあえず、終わったかあ。疲れる日いやつたなあ

『がんばつてるね、おとうさん』

んあ？

つぶつてた目えを開けたら、目の前がぼんやり虹
色して、女の子の アズキーナはんよりちつちや
な子の声が聞こえてきたわ

顔は見えへん。けど

「花壇かたんの手入れ、ちやんとやつとるんか？」

大きく息すつて、わいがゆっくりそう言つたら、

『かだん？ うん、やつてるよ。おとうさんがやれつ
て言つたんだもん』

ちつちやな子おの声が、すぐ返つてきた。

「さよか」

うしろにあの『たんたん』いうふしぎな音引き連

れて、な。

『じゃ、またね』

その言葉といつしよに、虹色も『たんどん』も消えて、わいの前にはまた、ドーナツ屋台のパラソルが広がってる。

「ん？どしたの？」

いつもの声で、かおるはんが訊いてとん。けど、そやな。

「花壇なんか、わいの住んでるところにはないんや。

帰ったら作らんとあかな。アズキーナはん
といつしよに」

かおるはんの手が、わいとアズキーナはんの背中を軽うたたいた。『たんどん』で。

—おしまい—